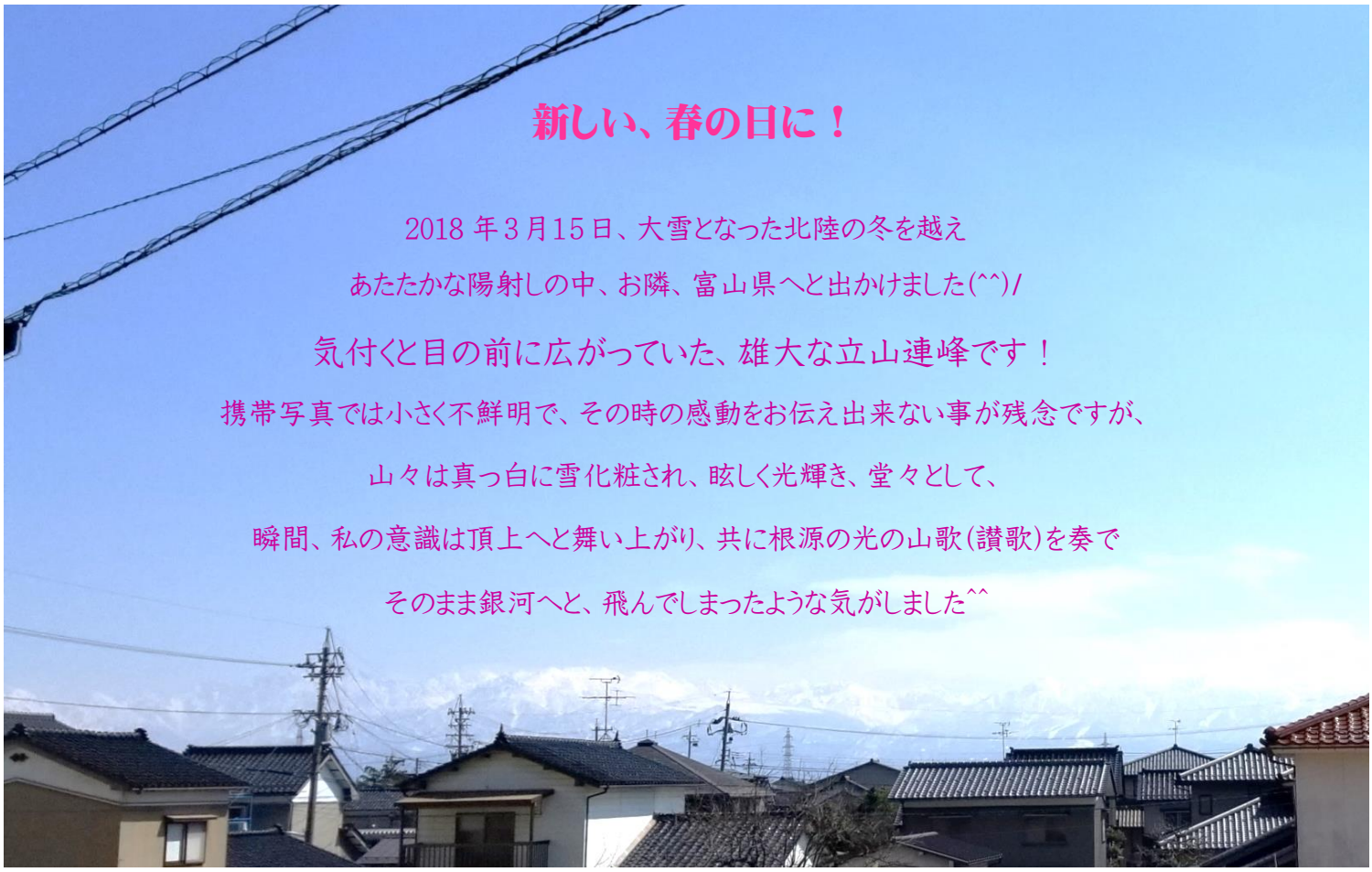


新しい、春の日に！

2018 年 3 月 15 日、大雪となった北陸の冬を越え

あたたかな陽射しの中、お隣、富山県へと出かけました(^^)/

気付くと目の前に広がっていた、雄大な立山連峰です！

携帯写真では小さく不鮮明で、その時の感動をお伝え出来ない事が残念ですが、

山々は真っ白に雪化粧され、眩しく光輝き、堂々として、

瞬間、私の意識は頂上へと舞い上がり、共に根源の光の山歌(讃歌)を奏で

そのまま銀河へと、飛んでしまったような気がしました^^

本当に立山かしら…？と思っていると、その場に居合わせた方より

劔岳、別山、立山･･･と、順に高さなども、詳しく教えていただくことが出来て、感激でした <(_ _)>

神武天皇以前の歴代の天皇や、世界中の偉人が訪れたとされている、御皇城山“皇祖皇大神宮”の

帰り道で出会った光景です(*^^*)

狭義では、石川、福井、富山の三県を“北陸”と呼び(新潟を入れて 4 県とする場合もあります)

私の住む石川はその真ん中、三つの県を繋いでいます

訪れた事のある、平泉寺白山神社や氣比神宮、若狭彦神社など、親近感を覚える福井県に比べて

なんとなく、フットワークが重い？感じの富山県でした

今回出会えた、素敵な景色や人によって、そのイメージが変わった(変わっていた…)気がします^^

大雪の後？が痛々しい山道を登り、感謝の参拝を終えて帰ろうとすると、

「ここが、空いてるよ～！」と、ベンチの隣へ座るように、大きく手を振る男女の姿がありました^^

白山比咩神社のある、石川県から来たことをお伝えすると、近々白山さんへ参拝する予定があった事と

「富山は“トト”、石川(加賀)は“カカ”、石川と富山はセットだよ！」と、笑顔で応えて下さり

私は、**本当にそうだ！！**と、妙に納得！

∞倍に膨らんでいくパワーを感じて、ワクワクしてきました！(*^^*)

次に向かったのが、二上山を御神体とする、二上射水神社（越中総社射水神社）でした

御祭神は二上大神、創建は不詳との事、二上山を神奈備とし、その麓に鎮座していましたが、

養老元年（717）に勅令を受けた行基が養老寺を開山し、

射水神社の別当にしたことで、神仏混合の神社となったそうです

明治になると、神仏分離令などの影響もあり、高岡城本丸跡に遷座される事となりましたが

住民の要望によって、二上の地に分社として残る事となり、戦後独立して、

“越中総社射水神社”を、正式名称とするようになったとの事です

高岡城跡に遷座された“射水神社”にも行ってみたかったのですが、地理感覚ゼロの私^^;

両方は無理かも？と思い、気になっていた“二上射水神社”へ直行しました

携帯ナビを頼りに向かっているのですが、バス停を間違えたり、交差点でグルグル回ったり（笑）

いつもの事でもありますが、いたずらに時間が過ぎていきます

電池残量もあまりなくなり、心細い思いで、人影のない道を歩いていくと

あっ！

鮮やかに映える、赤い鳥居が目に飛び込んできて、

太陽神のお出迎え？のような気がして、全身に力が蘇ってきました（^^）/

正面奥に、本殿が見えてきました

傾きかけた陽の光が注連縄に反射して、キラキラと輝いています

ハートのパワーが、満タンになっていく感じがしました！^^

写真をみていて浮かんできたのは、2012 年に訪れた事のある

石川県羽咋市の氣多大社です

どちらも美しい！ “太陽 ”と“月”のような、対比を感じます^^

調べてみると、富山県には４つの一の宮が存在する複雑な経緯があり、そのはじまりが

二上射水神社と、石川県の氣多大社にあったことがわかりました

能登国が越中国の一部であった時代、越中国の一宮は現在の気多大社であったが、

能登国を分立する際に、二宮であった射水神社が越中国一宮とされた。

白山比咩神社の社伝『白山記』には、

「二神（射水神社）が元々の一宮であったが、新気多（気多神社）に一宮を取られた」

とあり、気多大社から分祀して、国府の近くに新たに創建された気多神社（新気多）が力をつけ、

二上と新気多とが勢力争いをした結果、新気多が勝って一宮を名乗るようになったということになる

（ウィキペディアより）

地元石川県の氣多大社が、二上射水神社の前に、越中国一の宮であったとは、驚きです

白山記の文面をみると、射水神社が大切にされていたことが、わかる気がします

私が、二上射水神社に行ってみたいと思ったのは、

築山行事という、特殊な祭祀が伝承されていることに、興味を覚えたからです

≪富山県の無形民俗文化財、築山行事について≫

古代信仰では、神は天上にあり、祭に際して降臨を願うものとされた。

この行事は毎年４月２３日二上射水神社の春祭に行なわれる。

境内の三本杉と呼ばれる大杉の前に、社殿に向って築かれる臨時の祭壇は、

幅四間、奥行三間、二段になっており、上段中央に唐破風の簡素な祠が置かれ、

その前に日吉社、二上大神、院内社　三神の御霊代である御幣が立てられる。

屋根の上には斧をかざした天狗が立ち、下段には甲冑に身を固めた

四天王の藁人形が置かれ、祭壇のまわりは造花で飾られる。

祭礼の前日の夕刻、頭屋にあたる山森氏（御幣ドン）と神主が、

二上山頂にある奥の御前の日吉社から御幣に神を迎える。

一夜自宅でお護りし翌日築山に移す。院内社は祭の当日迎えられる。

祭儀は、午後二時から行なわれ、社殿で例大祭の儀式が済むと三基の神輿が巡行する。

ゲンダイジンを露払いに、御幣ドン、神主が続き、その後院内社、二上大神、日吉社の神輿が続く

途中で院内社の神輿だけが一旦鳥居の外に出て、戻って二上大神と日吉社の間に割って入る。

これを「院内わりこみ」という。

その後、築山の前と天の真名井の前で祝詞が奏上され、

本殿の前に戻って儀式が終る。祭儀が終ると築山はただちに解体され片付けられる。

遅れると神様が荒れるという。

この行事は、天上から臨時の祭壇に神を迎える古代信仰の本義を良く残している。

又、動かぬ築山がやがて動く曳山へと発展していったと考えられており、

高岡御車山の原初形態を知る上でも貴重である。又社殿の神事と古代信仰の築山神事の

二重の神事を同日に行なっている点も興味深い。

巡行する三基の神輿とは

先頭が、“院内社”で、二上山前面北の峯山頂にある摂社（院内の谷）

御祭神は、菊理媛神です！^^

二番目が、“二上大神”とされ、二上射水神社御祭神であり、武内宿禰、大己貴命等、諸説あるそうです

三番目は、“日吉社”で、二上山第一峯山頂にある摂社（奥の御前）、御祭神は、大山咋神

この三基の神輿の、不思議な動き「院内わりこみ」？については、その理由がわかっていないとの事？

わりこむのは、あの**“菊理媛?!”**という事で、私も勝手にエネルギー参加？してみました(^^)/

三基の神輿とは、射水神社にある三つの摂社（その神社の祭神と縁故の深い神を祀った神社）の事で

順に、“院内社”と“悪王子社”と“日吉社”と感じます

三基の内の一つ“二上大神”となっているのは、“悪王子社”の事でもあるのだと思います

“悪”という文字は、あまり良いイメージがありませんが、

「恐ろしいほど凄い」「とてつもなく強い」、という意味合いが含まれている気がして、

何かが封印されている？隠してある？という感じがします

悪王子社の御祭神は、“地主神”となっているので、まさに二上山そのもの、二上大神の事なのだと思います！

そして、菊理媛は“くくりの神”と言われるので、“日吉社”と“悪王子社”の間に割って入る“院内社”は

二つの社（神）を結ぶ働き、それが“院内わりこみ”の意味かもしれません^^

隠されていた悪王子社の正体は。。。？ですが、

私は、二上射水神社に感じた第一印象そのまま

＝“天照神”だと思います！！

二上射水神社の築山神事とは、隠れていた天照神が表に現れる

“天の岩戸開き”の事なのではないでしょうか！^^

社殿で最初に目にとまった“注連縄”は

「天照大神が天岩戸から出た際、二度と天岩戸に入れないよう太玉命が

注連縄（「尻久米縄」）で、戸を塞いだのが起源とされる。」とあり、まさにピッタリなのです！

また、遷座された“射水神社”の御祭神は、天照大神の孫とされる、瓊瓊杵尊です^^

二上とは、“二神”でもあり、本当の二上大神は

“アマテラス”（女性性）と“スサノオ”（男性性）の二神が統合され、一つとなった姿！

二上射水神社築山神事は、中今

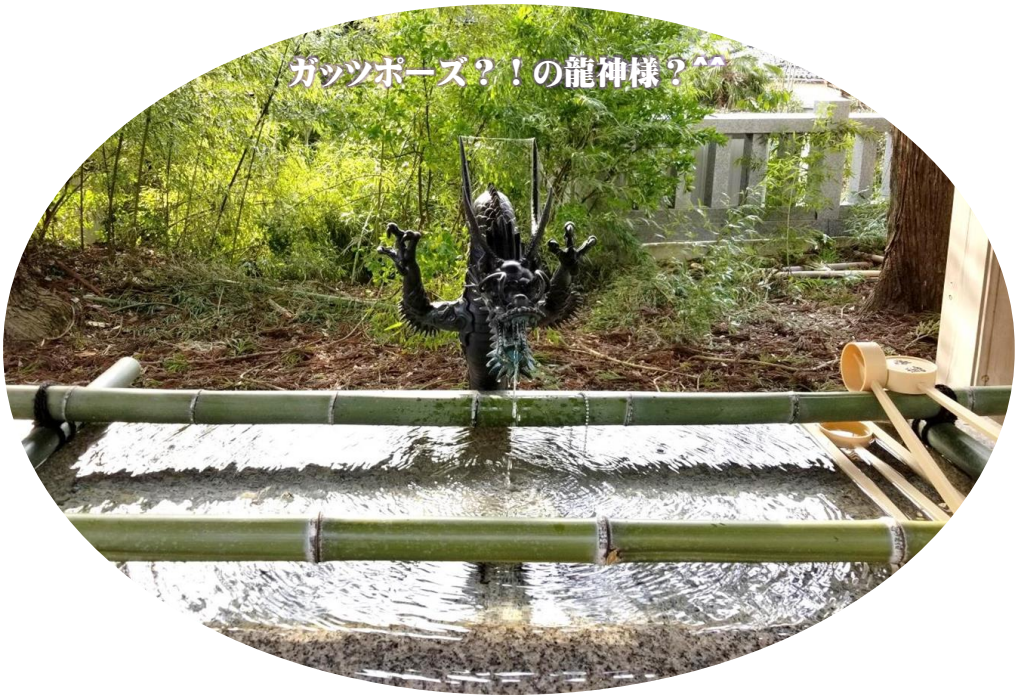
“根源の岩戸開き”でもあるのでは！

v*^^*

白山菊理媛は、未来からやってきて歴史を変える、ウィングメーカー

「院内社だけが、一旦外にでる」とは、

次元の壁を超えて飛び回る媛のお姿？かも?!（*^^*）



射水という地名は、水の湧出を表す言葉「い･みず」が由来との事^^

清らかで美しい天の真名井の波紋が、どこまでも広がっていく、クリスタルの空間を感じます！

二上山にも興味がありましたが、日が暮れる前に帰らないと…

慌てて、もと来た道を引き返すと、ちょうどバスがきて、ラッキードラゴン？ｖ(^^)ｖ

皇祖皇大神宮でお会いした御二人（イザナギ･イザナミ？^^）より

「二上山頂には、武内宿禰の墓がある」と教えていただいたので、調べてみると、

二上大神は、伊弥頭国造の祖神とされ、

初代伊弥頭国造は、武内宿禰の孫である大河音足尼であったそうです

武内宿禰（景行天皇 14 年- 没年不詳）は、記紀に伝わる古代日本の人物。

『日本書紀』では「武内宿禰」、『古事記』では「建内宿禰」、他文献では「建内足尼」とも表記される。

「宿禰」は尊称で、名称は「勇猛な、内廷の宿禰」の意とされる。

景行･成務･仲哀･応神･仁徳の 5 代（第 12 代から第 16 代）の各天皇に仕えたという伝説上の忠臣である。

紀氏･巨勢氏･平群氏･葛城氏･蘇我氏など中央有力豪族の祖ともされる。

皇祖皇大神宮に伝わるという、超古代文明について書かれた「竹内文書」は、

武烈天皇の勅命により、武内宿禰の孫の平群真鳥が、漢字とカタカナ交じり文に訳したとする写本群、との事

「竹内文書」についてネット検索してみると、皇祖皇大神宮竹内巨麿氏によって公開されたものとは別に

“正統竹内家”に伝わる、未公開のものがあることを、今回初めて知りました

○南朝後醍醐天皇の直系で「武内宿禰」を継承する、南朝小倉宮竹内家（正統竹内家）は

「竹内宿禰の墓」があるとされる、富山県高岡の二上山を祭祀拠点にしている

○内容は共通する部分もあり、巨麿氏が保持していた竹内文書の原資料ではないかと言われる

ネットの情報を見て、何が真実か？私にはわかりませんが、驚いたことがありました

〇「南朝小倉宮竹内家には、神武天皇の詔によって創建された神宮があり

その初代祭主は、神武天皇の皇后･媛蹈鞴五十鈴姫

二代祭主は神八井耳命で、皇位を弟に譲って自らは祭主となった。」

という記載を、目にした事です

2018 年 1 月、アカデミーにおける名古屋 KT セミナーの日、

熱田神宮での参拝を終え、“大神神社”へ行くつもりが、間違えて行ってしまった

大神社御祭神が、“神八井耳命” だったのです

はじめて触れる神名、何故に？と思ったのですが、間違えたのではなく、必然だったのかもしれません

“正統竹内家”が、私の中で、真実味をおびてきました

富山県にたくさんある神社の中で、中今、皇祖皇大神宮と二上射水神社を選んだのは偶然ではなく

二上山に眠る、両者の祖とされる、武内宿禰に導かれていた？そんな気がしてきました

二上射水神社の築山神事は、二つの竹内家の象徴でもあったのかもしれません

皇祖皇大神宮（竹内家）と、二上山（正統竹内家）について、簡単に語ってはならないと思いますが

私は、どちらにも共通する願いがあるのでは？と感じました^^

様々な宗教が生まれる前から、日本の地にあった、古神道を復活させることで

壁を取り払って皆が一つになり、世界平和を実現させる事です！

二者がより多くの人の意識にのぼることで、真実は明らかになっていくのだと思います

武内宿禰は、神功皇后の審神者であったと言います

審神者とは、「古代の神道の祭祀において神託を受け、神意を解釈して伝える者」とされ

日本の行先を左右する、とても重要な役割を担っていたのだと思います

審神者なんて、自分とはまったくかけ離れた世界のはなし。。。と思っていましたが

これからは、神･人が一体となった、神人の時代と言われます

それは、誰もが、神官（審神者）であり巫女＝“真実を見る目”をもつ世界

自分の中にすべてがある、

一なる至高の根源太陽“根源天照皇太神”とつながった

“日戸”の住む地球なのだと思います！

(*^^*)

白馬岳付近から望む、立山連峰と その奥に見える白山　ウィキペディアより

2018.3.21　善美 rumines